

# イギリスの都市—現状と課題—

井内 昇

## はじめに

ロンドン周辺をはじめとして全国で建設中の30余のニュータウンは、単にイギリス都市計画のシンボルにとどまらず、今や体制をこえて、戦後社会の生活様式におけるひとつの革新として、広く世界の都市開発に大きな影響を与えたことが認め

られている。ところが、このニュータウンが、最近都市政策の変更によってその建設計画が縮小されつつある。

このように大きな方向転換が必要となったのは、イギリスの都市を取り巻く事情に大きな変化が現れたからに他ならない。主義、原則は頑固に守りながら、一方現実の政策では大胆に時代の要請を

- 絶対的集中型
- 相対的集中型
- 相対的分散型
- 絶対的分散型
- ◇ 減少型



図1 発展型別ヨーロッパの都市分布 (1960~70)

資料: Drewett, R.: "Changing Urban Structure in Europe"  
Annals of the American Academy No. 451, September 1980. p. 64.

とり入れてゆくことはイギリスの行政の特色であるが、1970年代後半は、イギリスの戦後の都市政策の大きな転換期として記録に残るであろう。

## 1. イギリスの都市の動向

### (1) ヨーロッパの諸都市

イギリスは1973年にECに加入したが、これによってイギリスは名実ともに「ヨーロッパの一員」となった。ECへの加入は単に外交上の関係にとどまらず、イギリス経済はヨーロッパの経済統合の進展の中でその構造を変えつつある。経済活動が都市を中心に営まれる以上、イギリスの都市群は今後ヨーロッパの都市システムに組み込まれてゆくであろうが、現在のイギリスの諸都市をヨーロッパ都市群の中に位置づけると、例えば図1のような側面を持っている。この図は、人口20万以上の主要な都市を選び、各都市のゾーン別の人口増減型で分類したものであるが、要約すれば、東欧各国の都市群は依然として都心部、周辺市街

地とも人口がふえる「集中型」を示すのに対し、フランス、西ドイツはすでに都心部の人口減少、周辺市街地の増加、という「分散型」の段階にあり、イギリスは、ライン川下流地帯と共に都市部、周辺ともに人口が減少する「減少型」に属することが示されている。つまり、イギリスの都市群は、すでに大陸諸都市にさきがけて、大都市人口減少であらわされる都市の成熟の段階に入ったことをこの図は示している。

### (2) イギリスの人口の停滞

このように、すでに成熟の段階に達したイギリスの都市の動向を規定する社会的要因の中でとくに注目されるのは、表1にみられるように、1970年代に入りイギリスの人口の伸びがほぼ止まったことであろう。このような人口ゼロ成長のもとでは、都市部人口がふえれば当然農村部人口は減少することになるが、イギリスの農村部人口はすでに安定化して、近年は一部の地域で微増の傾向さえみられる。このことは、都市部人口もす

表1 イングランド・ウェールズの人口推移

(1000人)

	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977
総人口	48,854.4	49,025.6	49,153.8	49,158.9	49,157.1	49,142.4	49,119.5
男	23,737.2	23,830.0	23,901.1	23,914.9	23,930.9	23,931.6	23,922.6
女	25,117.2	25,195.6	25,252.7	25,244.0	25,226.2	25,210.8	25,196.9

資料：Kennet, S. 他：“British Population Trends in the 1970s” T.C.P. 1979. Oct.

表2 大都市圏の人口推移

(1000人)

		1971	1974	1971-4	1977	1974-7	1971-7	Per cent
大ロンドン	全 域	7,441.6	7,184.7	-256.9	6,970.1	-214.6	-471.5	-6.34
	内 部 ロンドン	3,016.5	2,851.4	-165.1	2,727.6	-123.8	-288.9	-9.58
	外 部 ロンドン	4,425.1	4,333.3	-91.8	4,242.5	-90.8	-182.6	-4.13
大都市圏	全 域	11,786.2	11,672.6	-113.6	11,517.0	-155.6	-269.2	-2.28
	大マンチェスター	2,734.4	2,708.5	-25.9	2,674.8	-33.7	-59.5	-2.18
	南ヨークシャー	1,320.4	1,315.8	-4.6	1,304.0	-11.8	-16.4	-1.24
	タイン・ウイア	1,208.7	1,187.9	-20.8	1,174.0	-13.9	-34.7	-2.87
	西ミッドランド	2,792.2	2,778.0	-14.2	2,729.9	-48.1	-62.3	-2.23
	西ヨークシャー	2,076.5	2,080.6	4.1	2,072.5	-8.1	-4.0	-0.19
	マーザーサイド	1,654.0	1,601.8	-52.2	1,561.8	-40.0	-92.2	-5.57
上記以外の地域	26,902.2	27,542.7	640.5	27,864.2	321.5	962.0	3.58	
イングランド・ウェールズ	48,854.4	49,158.9	304.5	49,119.5	-39.4	265.1	0.54	

資料：表1と同じ

にゼロ成長の状態にあり、従って、一部の都市での人口増は必然的に他の都市での人口減少と対応していることを意味する。

### (3) 都市人口の規模別動向

次に、イギリスの都市を個々にみると、どのような差違が相互間に存在するであろうか。

表2は、イギリスの都市を代表する大都市圏とその他との人口の動向を比べたものであるが、この表から次の諸点が指摘できる。

① 1970年代には、すべての大都市圏で人口が減少している。特に、大ロンドンでは7年間に約50万人を失い、700万人の大台を割った。

② 大ロンドンでは、とくに内部市街地での人口減少が激しい。

③ 大都市圏以外の人口は7年間に約100万人が増加しているが、後半には伸びが鈍化した。

つまり、この表が示しているのは、イギリスの都市では戦前に人口が集積した大都市圏が今や絶対的減少の時期を迎えているが、一方、中・小都市や一部の農村では人口増がみられ、国全体でみればほぼバランスしている、ということである。また、ロンドンの例にみられるように、内部での人口減少がとくにいちじるしい。このことを表3でみると、次のことが明らかである。

表3 都市内ゾーン別人口推移

(1000人)

		1951 ~ 1961		1961 ~ 1971		1971 ~ 1974*	
		増減数	増減比 (%)	増減数	増減比 (%)	増減数	増減比 (%)
都心部	全 国	500	1.9	-719	-2.7	-459	-5.9
	百万都市	-363	-3.7	-1199	-9.0	-473	-13.2
	その他	863	6.9	480	3.5	19	0.3
都心周辺部	全 国	1708	13.6	2503	17.5	442	8.6
	百万都市	783	10.2	828	13.1	53	2.3
	その他	925	16.4	1675	21.0	389	13.2
郊外地域	全 国	245	3.1	788	9.8	292	10.6
	百万都市	101	7.2	220	14.7	49	9.2
	その他	144	2.2	568	8.6	243	10.9

\* 10年比に換算 資料：図1と同じ

① 都心部人口は、1950年代にはまだ増加していたが、増加率は全国人口のそれに及ばなかった。つまり、都心部ではすでに人口の相対的減少があらわれていて、これが1960年代に入ると減少に転じている。

② 都心周辺部人口は、50年代から60年代へかけ増加率が上向いたが、70年代に入ると鈍化している。

③ さらにその外側の郊外地域をみると、50年代は全国人口増加率に及ばなかったが60年代に入ると逆転し、さらに70年代には都心周辺部を上廻っている。

以上のことから明らかなのは、イギリスの都市、とくに大都市では、都心部の人口の流出が早くから始まり、その周辺部もほぼ飽和状態に近づき、

外側の郊外地域が新しい人口増加ゾーンになっていることである。

## 2. イギリスの都市の課題

大都市を中心とするドーナツ化現象は何もイギリスだけのものではない。日本、アメリカも含め、西欧社会の各国でも都心部からの人口流出はいちじるしいが、外周部の郊外地域では依然として人口増加がみられ、大都市圏全体では人口増加となっているのが一般的である。この点、イギリスの代表的な大都市圏では、大都市圏全体でも人口のバランスが負になっているだけでなく、ロンドンの例にみられるように、都心部からの人口流出は深刻で、ロンドンでは都市経営上のボーダーラインを下廻ったといわれている。このような

大都市圏の人口の絶対減と、その背後にある全国人口のゼロ成長の中で、全国人口の増加を前提としてつくられた戦後のイギリスの都市政策が再検討を求められるのは当然といえる。戦後、イギリスは経済の不調に苦しみ、切迫した財政事情のもとで空間形成のための公共投資も切りつめられたが、その限られた枠の中から多くの部分が新しい市街地の建設にふり向けられた。一方、戦前に形成された既存の諸都市の内部地域の多くが再開発を必要とする状態になっていたにもかかわらず、再開発にふり向けられた資金は戦災復興事業を除けば相対的に少なかった。このため、戦後の自動車の普及を頂点とする生活様式の変化に対応した住環境の改善が進まず、イギリスの場合、都市部からの人口流出は、アメリカのような人種問題のためでなく、都市施設の老朽化に伴う居住環境の悪化と、公的資金で開発された新しい市街地の吸引力によって促進されたといつてよい。

1977年6月、政府は白書「Policy for the Inner Cities\*」を公表し、戦後の都市政策の方向転換を明らかにした。この白書は、全体で33ページにすぎず、論ずる対象も都市政策の一部にとどまるが、戦後のイギリスの都市政策の基本方針の変更を提言する点からいえば、イギリスの戦後の都市計画を方向づけた1939年の「産業人口の分布に関する王立委員会報告\*\*」（通称バーロー報告）にも比せられる重要なものである。1977年の白書が指摘する現在のイギリスの都市の問題点を要約すれば、次の通りである。

戦後、バーロー報告に基づいて推進された大都市の産業人口の分散政策の結果、大都市は活力を失い、とくに都市内部地域の経済基盤が弱体化したこと；戦後の新市街地の開発は中以上の階層に良好な住宅を提供したが、その代償として大都市内部の整備、特に居住環境の整備が立ち遅れ、そこが貧しい階層の吹き溜まりとなったこと；しかし、大都市内部地域は生活基盤は劣るものの、生産基盤は相対的に高い水準にあり、過去における

手厚い公共投資が遊んでいるから、もし内部地域に再び中流階級を呼び戻せばこれらの社会資本を有効に生かせるのであり、そのためには居住環境の改善が必要である。このような状況の中でなおニュータウンやその他の新しい市街地に生活・生産基盤充実のための投資を続ければ、ロンドンをはじめとする大都市の中心には二度と人口は戻らなくなるであろう。このように現在のイギリスの都市の問題を明らかにしたあとに、白書は具体的な幾つかの提言を行なっているが、その中で戦後のニュータウン政策が今やその使命を終える時期にきたことが述べられている。

イギリスのニュータウンが、上述のように戦後のイギリスの都市計画だけでなく、ひろく生活様式における革新のひとつとして評価されていることから考えると、政府が白書でその終焉を明示したことの意味は大きい。社会の制度、組織は、時代の流れの中で絶えず新しい事情に適合して行かねばならない。しかし、ニュータウンが19世紀のユートピア運動の中から生まれた田園都市の理念をうけ継ぎ、それが現在に至るまで居住のひとつの理想型とされてきたことからすれば、時代の要請とはいえ、やはり残念なことである。ロバート・オーエンからハワードを経てニュータウンにうけ継がれた社会改革の一環としてのユートピアの理想を、今後どのようにして町づくりの中で生かして行くかについては、すでに幾つかの具体的な提案や試みの中にその可能性を予想することができる。例えば、ハワードの創設した田園都市協会の後身である都市農村計画協会の事務局長D・ホールは、第三世代の田園都市の可能性を提唱しているが、それはハワードの理念を都市内部地域で積極的に実現して行こう、というもので、公園、遊歩道、グラウンド、街路樹、或いは家庭菜園といったさまざまな施設を積極的に整備拡充することによってそれが可能というのが彼の主張であるが、これはいささか苦しい主張のように思える。これに比べると、アメリカの“New Town in Town”

\* cmd. 6845

\*\* cmd. 6153, “Report of Royal Commission on the Distribution of the Industrial Population”

の考え方の方が現実的で、大都市内部の大規模な住宅団地に田園都市の理念を生かそうとするものである。ニューヨークのイーストリバーのルーズベルト島に建設中のニュータウンは、今後の大都市整備の中に田園都市の理念を生かしてゆくひとつの事例として注目してよいであろう。

都市内部地域の整備に関しても、従来のような大規模な再開発でなく、既存の街の個性をなすべ

く生かす形で、住民が定着できる町づくりをめざす修復“(リハビリテーション)”が主流になろうとしている。イギリスの都市では、住民を主人公にした新しい町づくりがより強化されようとしていると見てよいであろう。

British Towns—the status quo—

Noboru INOUCHI

## ヨーロッパの旅

金子晶子

1980年夏、高校地理教師を対象とする世界地理研究会主催の中国ヨーロッパの旅に参加した。コースは北京からイスタンブール、ミラノを経てスイス、東西ドイツ、ノルウェー、フランスと延べ13国、毎日が課題つきの超過密の23日の旅であった。この中から次の3点を中心にスライドを編集してみた。

### イスタンブール

ボスポラス海峡をはさんで広がる活気に満ちた国際的商業都市、モスクと尖塔が聳え、コーランの響きが聞こえるイスラムの街で、トプカプ宮殿、ブルーモスクがオスマン帝国の栄華を物語るのに対し、長くイスラム寺院とされていた聖ソフィア寺院では近年漆喰の下から壁面一杯にキリストのモザイク画が現れ、1453年オスマンに滅ぼされる迄の東ローマ帝国千年の歴史が息づいている。目抜き通りをまたぐ水道橋、城壁にも1600年にわたり首都として君臨した街の風格がある。現在はボスポラス橋の完成で小アジアと陸続きになり果樹地帯には工場が進出し、広場にはトルコの父アタチュルクの像が立ち、新しい国造りがめざましい。アジアとヨーロッパ、イスラムとキリスト教、長い歴史と現在が融合し混沌とした魅力をもつ街であった。

### スイス・ノルウェーの氷河

シンブロン峠越えで入ったアルプスではツェル

マットから快晴のもと3130mのゴルナグラートに上る。眼の前には最高峰のモンテローザをはじめブライトホルン、マッターホルンとパリスアルプスの雄大な360度のパノラマが展開しカール、氷河、モレーンと氷河地形のテキストでもみるようだ。急壁を下り眼下のゴルナグラート氷河(14.1km)上に立つ。羊背岩、モレーンが迫りクレバスから覗きこんだ碧氷の色が印象的だった。氷食谷上の段丘や崖錐、懸谷に喜び、U字谷をロースの源流に上る。絶壁にロース氷河の末端が垂れ下り圧巻、反対側にはラインの源流とフルカ峠付近が分水嶺である。

ノルウェーではオスロからスカンジナビア山脈を鉄道最高点フィンセ駅(1222m)で越え、ベルゲンにむかう。車窓に展開する針葉樹林と氷河湖、氷河もスイスの山岳氷河とは異り山頂を覆う平坦な大陸氷河となる。沿線の周氷河地形を見つゝU字谷を下り世界最大のソグネフィヨルドの湾奥に到着。ヴェルム氷期時の海面上昇でできたフィヨルドの狭い支流の船旅、垂直な崖からは滝が一気に落下する。61°Nという高緯度の初経験、外気温7°C肌寒い。オランダへの機上からも大陸氷のフォルゲ氷河をみる。氷河を満喫する旅であった。

### ヨーロッパでみた農牧業

スイスのパリス山村では石と木造を組み合わせたゴタルト式農家の並ぶ本村から中腹のマイエンザス、アルプへと三段式経営の移牧なのに対し、